

文化財センター通信

【かざぐるま】

風車

第 16 号



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

連続特集

重要文化財 福勝寺 その2

保存修理のため解体作業を進めている福勝寺本堂では、解体に伴う調査で、いったいどんなことが分かったのでしょうか。今回は瓦と屋根についてです。

福 勝寺の屋根、瓦にまつわる話を紹介しましょう。まずは、屋根の形の違いから。

【本堂】 七・六五m四方の三間堂で、短い棟をもつ寄棟造り。軒の出が深く、のちに軒支柱が付けられた。本瓦葺きの



写真1 解体中の求聞持堂の屋根の状況

だが、背面のみ棧瓦葺き。

【求聞持堂】 もともとは五・一五m

四方の宝形造り（四角錐形）で、本堂への繋ぎ部分が付属。大正時代の改造で東面が寄棟で西側は本堂に接合する今の姿になった。本瓦葺き。

【鐘楼】 切妻造り、本瓦葺き。滴水瓦が使用されている。

本 堂、求聞持堂、鐘楼の瓦は、大正時代に全面的に葺き替えられました。

古瓦がよく残されています。瓦は、大きさ・形状・工法などによって分類することが出来ます。例えば、福勝寺の軒丸瓦には三十八種の種類があり、丸瓦は実に五〇種類以上に分類できそうです。このうち、数が多い、まとまったグループを形成出来るものが六種類あります。

— 第 16 号の主な内容 —

1. 連続特集 重要文化財福勝寺 その2
2. コラム「考古学の散歩道」
謎の遺物 象の足!?
3. 報告 文化財建造物保存事業主任技術者研修会
4. 修理現場短信 「重要文化財旧中筋家住宅」



写真3 本堂 二の鬼瓦（建築当初）



写真2 本堂 一の鬼瓦（建築当初）

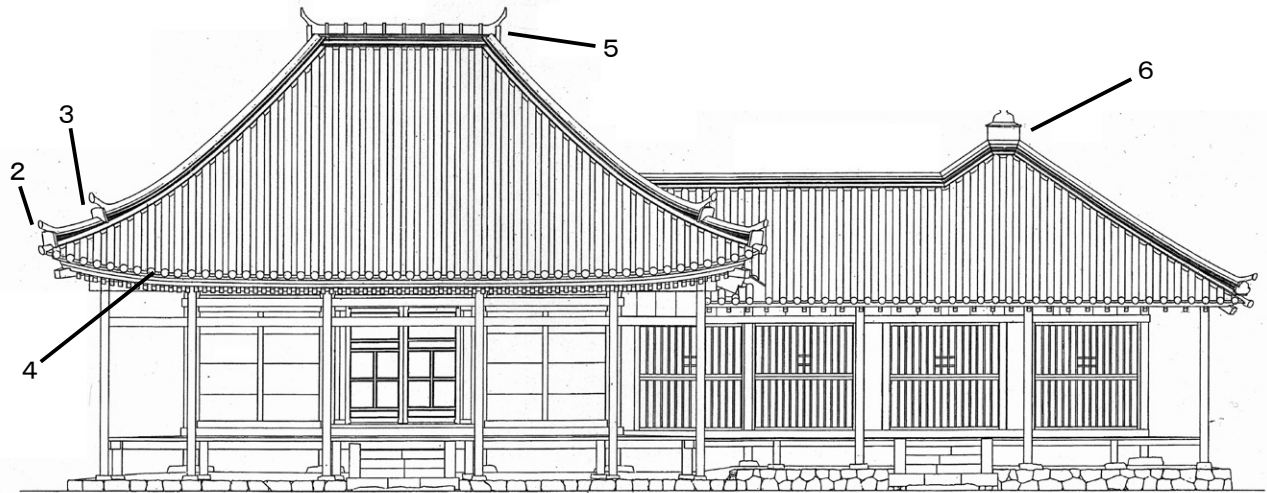


図1 本堂・求聞持堂 現状変更後（竣工予定）の正面図 ※図中番号は写真と対応



写真5 本堂 大棟鬼瓦（享保）「谷川七兵衛」の刻印



写真4 本堂 軒平瓦（左）と軒丸瓦（右）（建築当初）



写真6 求聞持堂 露盤（享保）「享保十九甲寅年 谷川七兵衛」の刻印

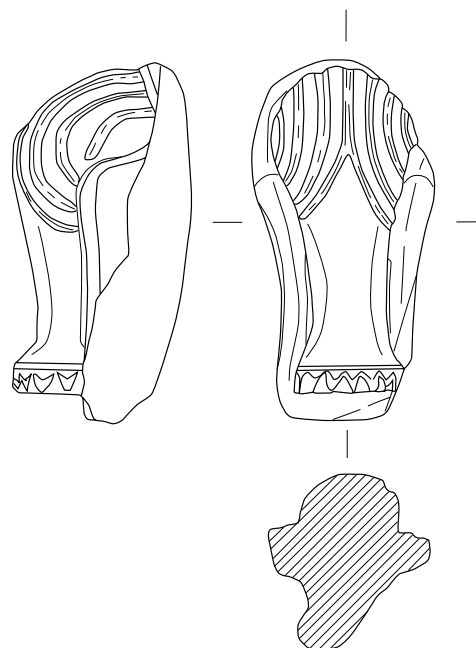
- A 室町時代。本堂建築当初と見られるもの。本堂の背面以外の殆ど。
- B 求聞持堂が建った江戸時代初期と見られるもの。求聞持堂の南面に多い。
- C 江戸時代の前期か？ 鐘楼南面に多い。
- D 江戸時代中期（享保）の修理時のもの。Bと同じく、求聞持堂南面に多い。谷川瓦（後述）。
- E 幕末と見られるもの。求聞持堂北面の殆ど。谷川瓦系統。
- F 明治〜大正期と見られるもの。求聞持堂東面に多い。谷川瓦。
- 本** 堂は、背面以外の三面に、建築当初である室町時代の瓦（丸瓦、平瓦）がよく残されています。この瓦はどっしりと重く、焼き具合が良い上に変形も少ないという、大変に質の良い瓦です。隅棟の鬼瓦も室町時代の建築当初のもですが、とてもユーモラスな顔つきをしています。高度な技術を持った職能集団がいたことは推測できるのですが、その人たちがどこで瓦を造っていたのか、また地元の人なのか他国の人なのかなど、詳しいことは

謎の遺物 象の足!?

遺物整理をしていると、時々「はて？ これはなんだろう??」と言う遺物に出会うことがあります。ここで紹介する「象の足」もその一つで、非常に丁寧に作られた膝から下部分の土製品です。これは2001年度に行われたみなべ町高田土居城跡の調査で、城の跡地で行われていた鑄造関係の遺構から出土したもので、16世紀のものと考えられます。膝部分には深い溝を幾重にも弧状を呈するように彫り込み、つま先には鋸歯状に刻みを入れており、その形状から象の足をモチーフにしたものとも思われます。

報告書に載せるにも用途が分からないことから文章も書けない始末。解明の糸口は、一緒に溶解炉や鑄型などが出土していることから鑄造に関わる遺物であると言う事。パソコンで色々検索して、鑄物製の香炉や釜の底に付く足部分が似た形態であることが分かりました。そして、足部分の鑄型は香炉や釜本体とは別に製作し、出来上がりの形を呈する「原型」に粘土を押し当てて製作することも分かりました。・・・

と言うことで、「象の足」の正体は、香炉や釜に付く「獸足」の鑄型を製作するときの「原型」だったのです。おそらくこれのみで出土した場合は、何であるか分らなかったでしょうね。 (川崎 雅史)



分かっていません。

本

堂大棟の鬼瓦には、「谷川七兵衛」の刻印（木製のスタンプと思われる）があります。これは、求聞持堂頂部の露盤ろばんの刻印「享保十九年甲寅」（一七三四年）と共通のもので、

この時に大掛かりに屋根を修理したようです。谷川は大阪府泉南の岬町の地名で、良質の土が採れたため瓦の産地となりました。既に江戸中期には販路を拡げ、戦後まで谷川瓦のブランドで通用していました。福勝寺でも享保以降の瓦は殆ど谷川系の瓦です。この瓦は比較的軽量で焼き具合が良いのが特徴です。

室

町当初の瓦は、すでに五百年あまりも経過していますが、質が良く、まだまだ使うことが可能です。建築後に取り替えられた他の瓦に関しても、一枚でも多く、大切に使うため、地元橋本地区の皆さんの協力のもと、解体した瓦の選別や洗浄を行い屋根葺きに備えています。

次

回では、本堂、求聞持堂の小屋組などの解体状況を紹介したいと思います。

(鈴木 徳子)

【報告】

文化財建造物保存事業主任技術者研修会

研修は文化財建造物の保存修理事業を円滑に進め、技術者相互の資質や技術の向上を図るもので、十月十二、十三日の二日間、東京大学農学部内の弥生講堂で行われました。全国から百人あまりが参加しました。

内容は特別講演と十二の報告、そして最後に韓国文化財保存修理の状況報告よりなるものです。一日目の午前中は「茶室等の修理をめぐって」として、中村昌生先生の特別講演でした。長年数寄屋建築の研究に携わってきた方ならではの視点のもとに、さまざまな修理事例の紹介や、茶室修理で留意すべき点などが示されました。

一日目午後より二日目まで、テーマを大きく「災害と修理」「注目される修理」の二つに分けて十二の報告がありました。「災害と修理」では、平成十六年度の自然災害による文化財建造物の被害や、土砂崩れに遭った英彦山神社の修理についての報告でした。

二日目にかけての「注目される修

理」は、現在進行中の社寺建築や民家建築の修理現場からの発表でした。報告テーマは様々でしたが、多くは現状変更に関わる調査事項についての報告で、調査で分かった建物の変遷や復元の考察、特徴的な工法や復原の問題点などが示され、これらにたいして、参加した技術者から多くの質問や意見が出されました。

最後に文化庁が進める日韓技術協力の一環として、韓国文化財庁の方々より、韓国での文化財建造物の保護制度や修復事例の報告がありました。

研修は全体として、近年活発になってきている文化財の活用や、近代建築・近代化遺産についての報告がなく、むしろ明治時代以来、連続と保存修理が行われてきた分野である、社寺建築の修理についての報告が中心でした。日常は交流のない技術者同士が会し、現場における最新の知見や修復理念などを聞き、それについて意見交換ができた有意義な研修でした。(御船 達雄)

【修理現場短信】

重要文化財旧中筋家住宅

旧中筋家住宅では、現在は主屋の屋根回りの工事を中心に進めています。三階部分の屋根の施工を他に先行させており、十一月半ばには三階屋根が葺きあがりました。主屋の広い屋根のな



主屋中庭部分の垂木を取り付ける赤根棟梁



荒壁付けの状況

かでは、三階はごく一部ですが、棟に漆喰を巻いた姿は美しく、すべて葺きあげるのがとても楽しみです。この他には、式台玄関の組み上げや三階手摺の修理などを行っていきます。また屋根や各部の組み上げを進めるのに平行して、土壁を付ける左官仕事も進めています。



←葺きあがった三階の屋根

風車 第16号

平成 17 年 11 月 18 日 発行

(財) 和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊 571-1

tel. 073-433-3843

fax. 073-433-4595

e-mail maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>